

# キコニアレター

2015.7.1 発行 No.5

## コウノトリの未来への予感と期待

～今年2015年の意義と動向～

兵庫県立コウノトリの郷公園副園長  
宇都宮 英信

今年は、三つの意味でコウノトリにとって意義深い年だ。

一つは、1965年にスタートした兵庫県の保護・増殖の取組が50年目を迎えたこと。二つ目は、兵庫県で初めて増殖に成功した親鳥を1985年にロシア・ハバロフスク州から受贈して30年目となること。三つ目は、2005年の秋篠宮両殿下による放鳥により、コウノトリが再び自然の大空に蘇ってから10年目にあたることだ。

折しもこのような節目の年に、千葉県野田市、福井県越前市、さらには韓国でも放鳥が予定されている。まるで、今年の意義をコウノトリ自身が意識していたかのように、2015年に実質的な意味合いを鳥たち自身が付加してくれているのだ。その中で、コウノトリの未来を予感させてくれるものとして、いま大きな注目を集めているのが徳島県鳴門市で造巢行動をしている雌雄だ。雄は2011年に豊岡市出石町伊豆の巢塔を、雌は2013年に朝来市三保の放鳥拠点で巣立った個体だ。

これまで野外のコウノトリは但馬周辺地域内でしか営巣しなかった。この雌雄が本当に但馬を離れ、“自力”で鳴門に定着し、雛をかえすことになると、但馬周辺地域外では野生復帰後日本初となる画期的な出来事となる。“自力”ということに大きな意味があり、彼らは偉大なパイオニア(開拓者)としてコウノトリ史にその名を刻むことになる。

地元は徳島県庁をはじめ、地域住民、農業関係者、大学関係者など多分野の方々が連携して定着促進連絡協議会をつくり、餌場の確保などに懸命に取り組んでいる。新聞やテレビの報道も連日熱を帯び、地元紙には『コウノトリ日誌』というコーナーが設けられているほどだ。

鳴門の雌が巣立った朝来市三保の放鳥拠点では今年も無事に雛が育ち、放鳥式が執り行われたが、式には徳島県の飯泉知事のメッセージが寄せられた。知事の熱い思いが感じられる内容で、放鳥式後には朝来市の多次市長から今後の徳島県との交流についても言及があった。

コウノトリは昔から「瑞鳥」「吉鳥」「幸せを運ぶ鳥」などと言われている。国を挙げて地方創生に取り組んでいるこの時代に、未来に向け全国各地で



写真提供 三宅 武さん(徳島県)

今シーズン徳島県鳴門市で確認されたJ0044 オス(上)、J0480 メス(下)による造巢行動、今後の繁殖が大いに期待される。

コウノトリを通じた新しい地域づくりや地域間交流が進み、その結果としてコウノトリだけではなく人々にも幸せが訪れることを願っている。その試金石の一つが鳴門の雌雄であり、今後もその動向に注目したいところで、鳴門の雌のコウノトリの愛称は、朝来市が公募により付けた「あさひ」。なんとも幸せを運んでくれそうな愛称である。

## コウノトリの個体数 (2015.6.30 時点)

### 飼育コウノトリ

施設・拠点名	オス	メス	計
県立コウノトリの郷公園	28	29	57
附属飼育施設コウノトリ保護増殖センター	16	18	34
養父市八鹿町伊佐地区放鳥拠点	1	1	2
朝来市山東町三保地区放鳥拠点	1	1	2
計	46	49	95

### 野外コウノトリ

カテゴリー	オス	メス	計
リリース	9	11	20
野外巣立ち	22	39	61
野生	0	1	1
計	31	51	82

# 園内の植生の変遷

—シカによる食害と人の手による適切な管理—

平成11年に開園し、年間約30万人が訪れる郷公園。しかし、その自然の様子は、開園当時と決して同じわけではありません。今回は、開園当初から郷公園を調査してきた内藤主任研究員が、郷公園の植生の変遷と今後の課題について解説します。

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科准教授  
兵庫県立コウノトリの郷公園主任研究員  
内藤 和明

コウノトリの郷公園の敷地内には落葉広葉樹林が広がっていますが、そのほとんどは昭和30年代にはアカマツ林だった植生から遷移したものです。定期的な伐採などがされなくなったことから、1999年に開園した当時には既に、斜面部はコナラやアベマキなどの落葉樹の森林になり、乾燥しがちで表土が薄い尾根に沿って細い帯状にアカマツ



公開ケージの背後にある尾根に帯状に残るアカマツ林(2001年春)

が残存する状態でした。敷地の周囲の山でも同様でした。ところが、その後数年の間にどんどんマツ枯れが進み、マツは疎らに孤立して残る程度になってしまいました。国内各地で起こってきたマツ枯れと同じく、主な原因はマツノザイセンチュウによるものだと考えられましたが、コウノトリの飼育をしている施設の森林であるため、薬剤の空中散布による対策は取りませんでした。代わりに、個々のマツに薬剤を直接注入する処置(樹幹注入)が2003年に試みられましたが枯れるのを食い止めることはできず、現在生存しているアカマツは数えるほどしかありません。マツ枯れ抵抗性品種である「ひょうご元気松」の苗木を何度か植樹していますが、シカによる食害の影響もあり、マツ林が復活するには10年以上、コウノトリが営巣できる大径木が育つには数十年かかりそうです。

シカが増加したことによる植生への影響も顕著です。園内の平坦部と森林との間(林縁)にはネザサなどの下層植生が繁茂します。かつては、野生動物の出現対策と施設管理を兼ねて定期的に林縁部の下草刈りを行い、見通しを確保していましたが、むしろその必要が薄れるくらい植生が

衰退してしまいました。現在は、アセビのように、シカが食べ残す特定の植物が目立っています。また、園内の湿地(ビオトープと呼んでいます)の主要部は柵田だったところを改変して開園時に造成したものであり、元々の水田の形状は残っていません。敷地東側にある自然観察路の隣りや公開ケージの奥の谷など、一部の場所のみ元々の水田の形状を残したビオトープになっています。そのうち、自然観察路の隣りの谷は小規模な谷津田のような景観を呈しており、ビオトープ部分と斜面の森林との間にごく小さな湿地状の場所がありました。2002年当時はまだ、このわずかな場所にトキソウやミミカキグサなどの小さな湿地の植物が見られました。これらは本来、生育環境の変化に敏感な植物であり、水田の周りで適度に管理された条件下で残っていた



園内の湿地にわずかに確認されたトキソウ(2002年夏)

のでしょうか。水田がビオトープに変わって従来の環境条件をそのまま維持するのが難しくなったことと、園内にシカが日常的に出没して食害による影響が大きくなったことにより、2005年頃からトキソウは見られなくなってしまいました。人の手による適度な管理がなくなる一方、シカによる食害という新手でかつ強度な攪乱が加わったことで園内の植生に大きな変化が生じてしまいました。

昨年度から園内においてもシカの一齐駆除が何度か実施されています。シカによる食害を最小限に抑えられたら、その先には人の手による適切な管理というチャレンジが待ち受けています。



今回は「人工巣塔」について郷公園 大迫先生に尋ねます

**Q** コウノトリは、  
どんなところに巣をつくるのですか

**A** アカマツなどの大木、電柱、鉄塔などに巣を作ります。野生復帰に取り組み始めたころは、電柱に巣を作ろうとしました。しかし、電柱や鉄塔では危険ですので、安全な場所を人間が作りました。それが人工巣塔です。

**Q** 人工巣塔は、  
いくつぐらいあるのですか

**A** 郷公園が確認しているものは、但馬地域周辺に約35あります。その中で今年繁殖に使っているのは9つです。  
人工巣塔は、どこにでもたくさん造れば良いというわけではありません。コウノトリのなわばりを考えて適切な間隔を空ける、また他の巣からお互いに見えにくい場所に配置することなどが大切です。

**Q** 人工巣塔の高さ・大きさは、  
どれぐらいあるのですか

**A** 高さは10~13mのものが多く、上に乗る巣の大きさは直径1~2mになります。

**Q** 最後に、  
今年の繁殖状況を教えてください

**A** 9か所の巣塔・電柱で繁殖しています。電柱と言っても、ヒナが感電しないように特殊なフレームを電柱の上に取り付け、そこで営巣しています。これは2006年に郷公園が考案し、電力会社の協力により設置したものです。さらに今年は、徳島県でも造巣行動が確認できました。このときも、ヒナの安全を確保するために電力会社の理解と協力がありました。豊岡から遠く離れた場所でも定着・繁殖してくれることを期待しています。

# 電 光 石 火



もともと水田であった土地を改修した公開エリア(東)の池、そこにカルガモの親子が棲んでいました。今年は親鳥が5羽のヒナを引き連れて泳いでいました。

ある日、ふと見ると、カルガモの親子のはるか向こう側、見かけない鳥が1羽とまっています。レンズ越しに青く見えるその鳥は、オオタカです。眼光鋭くカルガモを横目でにらみ続けています。危険を察知したのか、カルガモの親が「グエッ、グエッ」と大きく鳴き叫びました。その瞬間、オオタカが動くのが見え、気がつけば無意識にシャッターを切っていました。3羽のヒナは瞬時に水に潜り込みました。親はすぐ横でバタバタしていました。その瞬間の写真が上のものです。オオタカの今回の狩りは失敗に終わりました。やがてカルガモのヒナ3羽が浮上し、何事もなかったかのように親子そろって静かに泳いでいきました。

一方、オオタカはそのまま飛行を続け、観察サイトの上の木で一休み。その後、展望台のある山の奥へと飛び去りました。ちょうどオオタカも子育てのシーズンに当たりますので、ヒナの餌を求めているのかもしれませんが。

普段はあまり考えることもない、生きることの難しさ、すばらしさを思い知らされた1日でした。

(自然解説員 三木 芳喜)



# 第2回子ども向け 野生復帰 体験講座 レポート



なにがとれたかな？



コウノトリ、  
はっけーん！



なにがいるの？  
どれどれ...

マルチトープ(水路型ビオトープ)  
水田に接する水生生物の恒常的な生息場所です。  
中干し時の退避場所、越冬場所としても機能します。



6月14日(日)、祥雲寺地区のマルチトープをお借りしてコウノトリの餌生物調査を行いました。次から次へと現れるいきものに子どもたちは大喜びでした。また、近くの電柱にコウノトリがとまり、全員が双眼鏡で観察することもできました。



## INFORMATION!

### 特別観察会 「コウノトリ」

8月2日(日) 10:00-12:00

通常では入ることのできない非公開エリアを公開し、飼育ケージや馴化ケージと呼んでいるコウノトリのトレーニング施設を見ることができます。年に数回だけの貴重なチャンスです。

対象 小学生以上  
費用 無料

県立コウノトリの郷公園が、平成17年9月24日に国内初となるコウノトリの放鳥を行ってから、早いものでこの秋に10年を迎えます。当初の試験放鳥期間(5年間)を終え、コウノトリの野生復帰は着実に、そして本格的に進んでいます。

# おかげさまで野生復帰10年 10<sup>th</sup>

兵庫県立コウノトリの郷公園  
Hyogo Park of the Oriental White Stork

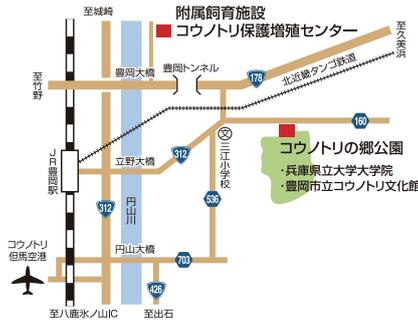
## ロゴマーク

## 野生復帰10年記念

できました。

### ACCESS!

- ◎神戸から[約2時間30分]  
姫路から[約2時間]  
最寄りIC(北近畿豊岡自動車道)  
八鹿氷ノ山ICから40分
- ◎JR山陰本線「豊岡駅」から約4.5km  
全但バス(コウノトリの郷公園・法花寺・下の宮行き)
- ◎コウノトリ但馬空港から約1.2km



### 編集後記

今年は野生復帰10年、保護増殖開始50年の節目の年です。職員一同、初心に帰りコウノトリの野生復帰がさらに進むように邁進していきます。また、キコニアレターの発行が2年目になりました。皆様に喜んで読んでいただけるように、ますます紙面の充実を図っていきます。

(自然解説員 三木 芳喜)



## 兵庫県立コウノトリの郷公園

Hyogo Park of the Oriental White Stork  
〒668-0814 豊岡市祥雲寺字ニヶ谷128番地  
TEL. 0796-23-5666  
FAX. 0796-23-6538

27教☎2-011A4

e-mail: kounotori@stork.u-hyogo.ac.jp

ホームページ: http://www.stork.u-hyogo.ac.jp

開園時間: 9:00~17:00

休園日: 毎週月曜日(休日に当たるときはその翌日)・12月28日~1月4日